



鶴岡市 / 馬渡の桜並木

馬渡の小川に注ぐ 満開の春

 荘内銀行

Cradle 3 「クレードル」 出羽庄内地域文化情報誌

2021 March/April
令和3年3月1日発行(隔月奇数月発行)第11巻4号(通巻64号)

発行 / Cradle事務局 山形県鶴岡市山王町8-15 [株式会社 出羽庄内地域デザイン] 電話0236 (64) 0888
制作 / Cradle編集部 山形県酒田市京田2-59-3 [コア・コミュニケーションズ] 電話0234(41)0012

美しくつかしい、日本をのせて。

Cradle

特集
庄内の画家たち
庄内憧憬
椎川忍
(一財)地域活性化センター理事長

[クレードル] 出羽庄内地域文化情報誌

3

2021 March/April
TAKE FREE
NO.64



豊かな歴史と、多様な地域資源に恵まれた庄内は、日本における最もユニークな地域といえる。

庄内と聞くと、秋田県由利本荘市出身の私は何ともいえない懐かしさと憧れを感じる。

春の雪解けと清冽な湧き水、夏のコバルトブルーの海と芳醇な岩ガキ、秋の鮮やかな紅葉や黄金色の稲の実り、冬の豪雪と荒れ海など、日本海に面し鳥海山を挟んで自然環境を共有していて、似た面も多いがさまざまな違いがあることも感じる。

江戸時代には庄内藩は譜代の雄藩で私の出身地は小大名(旗本)の集まりである。庄内藩は表高よりも実際の石高はかなり高く20万石の実力があつたというし、江戸時代を通じて一度も転封の憂き目に遭わなかった。加えて、酒田は北前船の寄港地として大いに栄えた。現在、矢島修験の跡形はなく、国の史跡指定にこぎつめた程度であるが、羽黒古修験道は蜂子皇子の開山以来1400年にわたって引き継がれ、私も7年にわたって秋峰の行に入り先達に名を連ねている。

このような豊かな歴史に生まれ、多様な地域資源に恵まれた庄内は、さまざまな意味で日本における最もユニークな地域といえる。

それを生かした産業振興、地域づくり、観光誘致などはこれまでも行われてきており、最近では若手による地域資源を活用した斬新なアイデアによる起業や、先端的ベンチャー企業の立地などもみられるが、地方創生の究極の目的である出生率向上やサステナブルな人口構造の構築については、まだ先が見えていない。

人口減は日本全国で進み、庄内では特に高齢者の自然減によるところが大きく、そう簡単に止まることはないのでは、人口維持を目標にするのは無理がある。当面は、移住者やUターン者を確保し社会減をゼロに近づけ、20年から30年かけて人口が現在の3分の2から2分の1になっても、そこから先はその人口が維持できるサステナブルな地域とすることが求められる。そのためには、その

目標人口を維持できる付加価値生産額を確保しなければならない。

詳細についてはREESAS^{リーサス}を用いた経済循環分析によることが望まれるが、比較的強い分野である農業のさらなる高付加価値化、電子部品のデバイス製造業のクラスター化、観光業の高度化などが求められ、比較的に弱い情報通信、卸売、教育分野では安易に域外に所得を流出させない努力が必要である。

そのためには、わかりやすい情報提供と改善策の提示および住民参加の運動が求められるであろう。今後の庄内地域の連携と官民一体となった努力に期待したい。



秋田との県境にそびえる“出羽富士”鳥海山と月光川

しいかわ・しのぶ(一財)地域活性化センター理事長、1953年生まれ、秋田県出身、東京大学法学部卒業後、自治省に入省。香川県地域計画課長、島根県総務部長などを経て、総務省財政課長、総務省・内閣府大臣官房審議官、総務省自治大学校長、自治財政局長などを歴任、2012年9月退官。地域力創造審議官(初代)在任時に、「地域おこし協力隊」を創設。また「地域に飛び出す公務員」ネットワーク(現代表)の立ち上げなど、地域活性化人材の育成に注力。現在、内閣官房地域活性化伝導師、総務省地域力創造アドバイザー、東京農業大学・島根県立大学客員教授。著書に『緑の分権改革あるものを生かす地域力創造』(学芸出版社)など。

特集 庄内の 画家たち

絵画をみる経験を通して、美しく夢のような世界も、幻滅するような世界も私たちはいくつもの人の世を知り、また、自分を知るのだろうと思います。明治から昭和、日本の芸術家や美術家たちが表現を模索し続けた時代に絵画と出合い、自分の表現を探し続けた画家たち。人の価値観も感性もゆらぐような社会の動きの中で庄内を郷里に持つ画家たちは、外の世界にふれて何を想い何を描き続けてきたのでしょうか。4人の画家たちの一枚一枚の絵、その世界は、出合った人それぞれの中で広がっていきます。



庄内を代表する女流日本画家・伊藤喜久井の絵には、内に計り知れない強靭さを持ちながら、庄内に生きる女性たちの姿が描かれています。生涯を絵に捧げた母の姿を、堀朋さんに綴っていただきました。

伊藤喜久井

庄内の地に抱かれて 文・堀朋（長女）

いとう・きくい／明治44年、鶴岡町七日町（現鶴岡市本町2丁目）生まれ。鶴岡高等女学校（現鶴岡北高）在学中に小貫博堂の指導を受ける。昭和3年、女子美術学校入学。卒業後、小貫の紹介で荻生天泉に師事。昭和20年、東京大空襲のため鶴岡に帰郷。30年、白薔社に参加。春光会、新興美術院、火曜会（現佳陽会）などで活躍、受賞多数。平成10年、斎藤茂吉文化賞受賞。14年、逝去。



母の絵には、庄内という地に根を下ろし、喜びも苦しさも飲み込んで営む生のきらめきがある。



「こたつの母子」昭和初期 絹本着色・二曲一隻屏風 142.5×147.3cm 致道博物館蔵

母・伊藤喜久井はここ庄内の地で生まれ育ち、90歳で亡くなるまで絵を描き続けました。「絵を描くのは趣味？」との若かった私の問いに、「描くのは生きること」と返答した。眩しいような母でした。今年生誕110年に当たると知り、改めて作品を見る時、その環境と時代に目を向けずにはいられません。「女も好きなことで生きていかれたら」と幼い頃より絵を習わせ、小貫博堂先生の指導を経て女子美術学校に進む道をつけたのは、明治の女である祖母で、それは当時としては画期的なことだったと思われまます。1920年代は日本女性の高等教育が広がり、一方で1931年に満州事変が起き、良妻賢母の思想も強まりました。女にとっては矛盾する時代です。創作意欲に燃える若き女性アーティストが、その頃一体どのよ

うな思いで絵を描いていたのか、聞きそびれてしまったのがとても残念です。開戦の頃に結婚、敗戦の年に帰郷。戦中戦後の苦難の時代、古典的日本男子の見本のような父と共に生活し、3人の子を育てながら描き続けることが、経済的にも時間的にもいかに大変なものであったかがしのべれます。当時の女性画家の動向に触れて、東京に留まっていれば自由な活躍ができたかもしれないという思いもあつたのではないのでしょうか。昭和20年代頃から始まる、展覧会を観るための夜行列車での「東京行き」のことが、子ども心に感じた「寂しさ」と共に今、思い返されます。私にとって好きな作品の一つは、そこに母と祖母を重ねて見てしまう初期の「こたつの母子」です。今の

ような暖房のない頃、背を丸めてこたつに入っている、どことなく寂しげなキリッとした母親。うたた寝する娘。その背後には姉さま人形が置かれています。明かりはランプ。何か見覚えがある当時の鶴岡の暮らしとそのにおいがにじみ出ています。庄内平野の四季が織りなす自然や、独自の風俗、庄内という地を踏みしめ、日々を支える女性たちの生きる姿も母はよく描いておりました。「待つ女」も多くあります。駅で待つ、春を待つ、生きる中でじっと待つ。外からは計り知れない強靭さを内に秘めながら「待つ」という姿勢。それは母の奥深くで燃えるような焔を秘めた生き方の表現であり、またこの地の人々や生き方にどこか通じるような気がします。母の絵には、庄内という地に根を下ろし、喜びも苦しさも飲み込んで営む生のきらめきがあるように思うのです。



「浜の女」平成14(2002)年 紙本着色・額装 145.5×112.1cm(F80号) 鶴岡市蔵



「雪路」平成8(1996)年 紙本着色・額装 162.1×130.3cm(F100号) 鶴岡市蔵

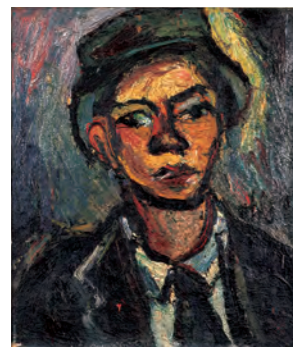


「一隅」平成12(2000)年 紙本着色・額装 116.7×90.9cm(F50号) 鶴岡市蔵

【お知らせ】
「生誕110年 伊藤喜久井展 一生命のぬくもり」鶴岡アートフォーラム
2/6(土)~3/7(日) 9:00~17:30/月曜日休館/一般200円、高大生100円、中学生以下無料



「ランプのある静物(A)」昭和4(1929)年 油彩・麻布(F60号) 1930年協会展特陳 個人蔵(本間美術館寄託)



「帽子をかぶる男」昭和4(1929)年 油彩・麻布(F8号) 個人蔵(本間美術館寄託)



「停車場」昭和4(1929)年 油彩・麻布(F60号) 個人蔵(本間美術館寄託)



「裸婦」昭和3(1928)年 油彩・麻布(F25号) 個人蔵(本間美術館寄託)

彼の晩年は、濃密な時間と情熱を
そそぎ込んで生き抜いた画家の
鮮烈な青春でもあった。

【取材協力】本間美術館、八王子市夢美術館



写真・大野五郎

おの・こうきち／明治42年、酒田市米屋町に生まれる。酒田中学(現酒田東高)を中退し東京、川端画学校などで絵を学ぶ。その後数々の入賞を経験。20歳になる頃には画家として高い評価を得ていた一方で幼少期からの病が悪化し、昭和5年に逝去。作品の多くが本間美術館に収蔵・保管されているほか、中学の同級の佐藤三郎が主となって『小野幸吉画集』(昭和7年)、『小野幸吉全画集』(同62年)を刊行。

夭折の画家、小野幸吉の絵は没後90年が過ぎた今もキャンパスの中で芸術への情熱を燃やし続けているかのようです。美しい色彩を持ち、力強い言葉を持つ詩人でもあった小野幸吉という人生を県詩人会の南悠一さんとたどってみます。

小野幸吉

鼻血とフォーヴィスム

文・南悠一(山形県詩人会会員)

小野幸吉は昭和五年(一九三〇)一月八日に二十歳と十カ月の若さで死んだ。代表作となる「帽子をかぶる男」「停車場」「ランプのある静物」など、多くの作品は亡くなる一年前あるいは一年以内に描かれた。小野の死因は腎血兼脳血栓という病名で、鼻血が止まらない状態となり、入院から一カ月後に東京の大病院で永眠している。死を前にして彼は口がきけなくなり、目も見えなくなった。二十歳を迎えた青年の人生がそこで終わってしまうとは容易に想像だにしない。短い生涯を疾駆するように生きた小野にとって、十九歳から二十歳までが晩年となった。彼の晩年は濃密な時間と情熱をそそぎ込んで生き抜いた画家の鮮烈な青春でもあった。

小野は関根正二の絵に触発され、高間筆子の絵に憧れていた。自室の何枚か続く襖に関根の「信仰の悲しみ」を模写している。高間の作品は『高間筆子詩画集』に残されているだけだが、小野も高間もフォーヴィスムを基調とし、画風に共通したものが感じられる。小野の死後、同郷の佐藤三郎らによって刊行された『小野幸吉遺作畫集』(金星堂)に筆子の兄の高間惣七が小文を寄せ、「始めて私のアトリエで(小野の)絵を見た時、妹(ふで子)の絵に似通った点があるのに、深く頭に残ったのです。川端研究所で妹に會つて、ふで子の繪が好きだとよく、云つていた位ですから、何か或共通點を持つて居たと想像します」と記されている。

高間筆子の画歴はわずか二年ほどだが、小野が憧れを抱くほど確信的な絵を描いた。関根は結核で二十歳で亡くなり、高間はスペイン風邪による発作で二階から飛び降り二十二歳で他界した。二人の画家の短い生涯も小野と重なり合っている。命を燃やし尽くして早世する画家たちが稀ではなかった時代である。

小野幸吉に影響を与えた高間筆子については、信濃デッサン館、無言館館主であり作家である窪島誠一郎の『高間筆子幻景』(白水社)に克明に書かれている。

入院の一カ月前に小野は酒田に帰郷しあつみ温泉で静養したが、一週間ほどで東京に戻り、絶筆となる六十号の「ランプのある静物(A)」を描き上げた。それまで四点描かれた「ランプのある静物」の中でもフォーヴィスムが際立っている。テーブルの側面に走る暗い赤、ランプに縁取りされた戦慄のような赤が血の色を連想させる。傾いたテーブルは死に追いつめられていく彼の精神状態を暗示しているのように見える。



「冬景色」1942年 油彩・キャンバス 89.4×145.5(cm) 酒田市美術館蔵



「秋・収穫」1944年 油彩・キャンバス 89.4×145.5(cm) 酒田市美術館蔵



「山村(赤)」1960年 油彩・キャンバス 80.3×100(cm) 酒田市美術館蔵



「白糸の滝」1989年 油彩・キャンバス 145.5×89.4(cm) 酒田市美術館蔵

【お知らせ】
「池袋モンパルナス—画家たちの交差点—」
酒田市美術館
11/20(土)～令和4年1/10(月・祝) 9:00～17:00
12月～3月は月曜日休館(祝日の場合は翌日)
一般900円、高校生450円、中学生以下無料
齋藤長三のほか齋藤求、今井繁三郎など
庄内ゆかりの作家が出品。

「北方的温暖さ——造形された愛」という草野の詩文は、齋藤の芸術に深い理解を示した言葉だと思えます。

齋藤長三の画風が「詩情にあふれる」といわれるのはその風土の色合いや人の表情が郷愁を誘うからかもしれません。自身の芸術観を模索し続けた心象の画家、その作品を収蔵する酒田市美術館の武内治子さんの文で、その画業をひも解きます。

齋藤長三 郷愁を誘う心象の画家

文・武内治子(酒田市美術館学芸員)

さいとう・ちようぞう／明治43年、酒田市漆曾根の農家に生まれる。酒田中学(現酒田東高)在学時から油絵を描き始め、昭和4年に上京後、東京高等工芸学校図案科に進学。在学中に独立美術協会展に出品、10年にはD賞を受賞。武蔵野美術大学などで教職にも就く。平成6年の没後、故人の遺志を受けて夫人が作品72点を酒田市に寄贈。酒田市美術館に収蔵されている。



齋藤長三は、生涯「村落」を描いた画家と称されることが多く、自身も「殆どの画題を『村落』としても構わぬくらい単調なテーマ」と語っています。しかしその画業をたどると、「単調なテーマ」の中に、激動の時代に翻弄されながらも、自らの絵画表現を模索し続けた真摯な画家の姿が浮かび上がります。

1940年代の初期の作品では、16世紀フランドルの画家ブリューゲルを想起させる絵を描きました。《冬景色》は、ブリューゲルの《雪中の狩人》の影響が色濃く、物語の風景のような雰囲気があります。詩人・草野心平は齋藤の絵画について「北方的温暖さ——造形された愛」という詩文を書いています。草野が「北方的」と表現した背景には、齋藤が東北出身であること、彼が北方ネサンス期のブリューゲルに傾

倒していたことの2つの要因があったと考えられます。

1944年に独立展に出品した《秋・収穫》は、家族が疎開していた長野の農村風景です。戦時中の作品について「僕は積極的な戦争賛美ではなかったけれど、やはり何となく日本を大事に思うというような気持にはなってきたんでしょね」と語っています。当時、農作物の生産は国民に課せられた銃後の務めでした。芸術の世界でも表現の自由が制限されていく中で、時局に合わせた画題を選んだようです。しかし作品からは戦局の厳しさを感じさせず、黄金色に輝く稲をただひたむきに収穫する農民の姿を描いています。

1960年代には、山村をテーマに抽象画を描くようになっていきます。この時期の特徴として、航空写真を見るような構図から独自の絵画

世界を構築しています。この抽象の時代は10年ほど続き、再び具象の時代へと戻っていきました。

1970年代は、画面に人物が登場することは少なく、代わりに民家や道を効果的に配することで、人が自然と共存している気配を描き出しました。晩年に入ると芭蕉が歩いた道をたどって取材に足しげく通い、「奥のほそ道」をテーマに山寺や白糸の滝、羽黒山などを描いています。自分を限定したり、自分の道を究めたりしようとせず、「絶対悟らない」と語っていた齋藤の芸術は、その時々で表現方法を変えながらも、村落の営みに対して常に冷静に観察し、深い敬意と愛情をもって絵画世界へ投影させています。「北方的温暖さ——造形された愛」という草野の詩文は、齋藤の芸術に対して深い理解を示した言葉だと思えます。



「石」制作年不詳 油彩 45.5×53.0cm (F10号) 鶴岡市蔵



「ブリキ板」昭和34(1959)年 油彩 80.3×100.0cm (F40号) 致道博物館蔵



「紙」昭和34(1959)年 油彩 45.5×37.9cm (F8号) 致道博物館蔵



「蓆(むしろ)」昭和30(1955)年 油彩 116.8×91.0cm (F50号) 致道博物館蔵

【取材協力】三浦恒祺、鶴岡アートフォーラム
 【参考資料】美術雑誌『みづな』昭和45年4月号(美術出版社)、致道博物館「異色の洋画家 地主悌助の画業」展カタログ(平成2年)、一枚の繪 銀座美術館「地主悌助回顧展」パンフレット(平成13年)

物心は一如であり、物は心でもあり、
 霊でもあると思うので、物を書いて
 そのままで、心象表現が出来ると思う。

地主悌助

静謐なる「物心一如」の世界

石や白い紙、ブリキ板、大根など、身近にある物を
 ありのままに描き続けた地主悌助は、神奈川に移住し、
 物心一如の探求をさらに深めた後年、中央の文化人や愛好家を中心に
 「異色の画家」として高い評価を得るに至りました。

「物心は一如であり、物は心でもあり、
 霊でもあると思うので、物を書いてそのままで、
 心象表現が出来ると思うのである」



「自画像」(部分)昭和30(1955)年 油彩 致道博物館蔵

じぬしてすけ／明治22年、鶴岡町最上町(現鶴岡市上畑町)生まれ。庄内中学校中退後、検定試験を受け小学校教員となる。秋田、山口を経て大正14年に鶴岡中学校(現鶴岡南高)に赴任、美術団体白麴社2代会長となる。昭和25年、退職。29年、神奈川県中郡二宮町に転居。46年、新潮社の日本芸術大賞受賞。50年、逝去。

昭和50年、86歳で逝去する前に美術雑誌『一枚の繪』8月号にそう寄稿した地主悌助。その画業の始まりは、23歳で鶴岡から上京し、文展で坂本繁二郎の「うすれ日」に出会い、感銘を受けたことからでした。翌年、坂本の自宅を訪ね、絵から受けた印象と変わらぬ人柄にさらに思慕の念を強め、油絵を師事。後年に「物を書くことは心を描くこと」、「絵の価値は、その絵に現れた作者の心の価値」と語った地主の絵画論は、坂本の絵に出合ったこの時からあったに違いありません。

しかし60歳まで勤めた鶴岡での美術教員時代の画風は、教え子で後に東京国立近代美術館職員となった滝澤泰が人柄について「ボンボンとした物言いと、寡黙にして謹厳そして頑固と、やはり明治鶴岡人を彷彿とさせる方だった」としつつも、「至って平坦な客観的な写実の教科書然とした絵だった」と記しているように、それほど特徴はありませんでした。同じく教え子の鶴岡在住の画家・三浦恒祺さんも、絵に対する印象よりもやさしくて温厚な人柄を語り、「口をとんがらせてお話するから、陰でフグフグって呼んでね」「私は地主先生と出会ったことで、絵を描き続けようという気持ちが強まりました」と、当時の貴重な教員時代の写真を見せてくれました。

そんな地主が頭角を現すようになったのは、65歳で同郷出身の友人に誘われ、神奈川県中郡二宮町に移住してからのこと。2年後、日本橋で初の個展を開催すると、文芸評論家・小林秀雄の目に留まり、「実物を熟視して育てた彼の確信がある」と高い評価を受け、中央画壇に名が知られるようになります。その後も抽象絵画など新しい芸術への気運が渦巻く時代に、その潮流の反対にいた地主の画風は、時に画壇から「異色」と言われながらも哲学者の谷川徹三、随筆家の白洲正子ら文化人たちに愛され、82歳で新潮社の日本芸術大賞を受賞しました。



庄内写真季行

40

酒田市／御積島・烏帽子群島

蜃気楼をうつつすらと纏った島々が
幾重もの時空を超え
悠久の時に揺れていた

荒々しかった冬の海は影をひそめ、春の便りと共に海には碧さがよみがえってくる。桜が散り終わる頃、日の沈む方角に飛島が重なるポイントがある。飛島の西方には、幾つかの離れ小島がある。龍神がすむ聖地といわれる御

積島は、切り立った絶壁が特徴的だ。そのやや西方にある烏帽子群島も負けじとその鋭さを競うかのようだ。かつて日本海を航行していた北前船の船人たちも、夕陽に染まる島々を目に焼き付けていたであろう。

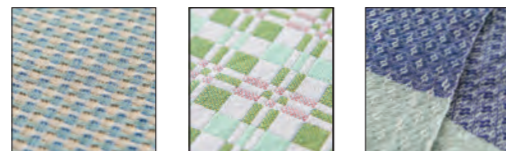
春風が吹いたら
これを巻いて軽やかに
お出かけしよう
そう思わせてくれるのは
庄内町生まれの手織りストール

itoriの 春色ストール

春の日差しを思わせるやわらかな色合いと、透け感のある軽やかな手触り。春から夏にかけて重宝しそうなこのストールは、庄内町在住の染織家、「itori」こと大滝郁美さんの作品だ。

大滝さんがテキスタイルの世界に興味を持ったのは高校生の時。卒業後、京都の専門学校で染色を学び、働きながら通った東京の夜間スクールで手織りの面白さに目覚めた。織りを仕事にしようという決意し、伝統的に手織りの文化が生活に根づいているテキスタイル王国、スウェーデンに留学。語学のハンデを乗り越えながら技術を習得し、知識や造詣を深め、3年間の学びの集大成としてスウェーデン国立手工芸協会の職人試験も見事に合格し、平成26年に帰国した。

以来、最初は実家のある酒田市で、平成29年から庄内町に住まい兼工房を構え、制作に励んできたが、最近織りに対する考え方が変わってきたという。自宅から庄内平野を眺め、散歩し、鳥海山や月山の美しさに感動する日々を送る中で、スウェーデン織物へのこだわりから少し解放され、いかに崩し、遊ぶかという意識が芽生えてきたのだ。そのせいか最新作のストールは、スウェーデンの伝統的な小花模様でありつつも、独自の歪みやゆらぎが風にたゆたう花畑や、雲が流れる空、海の穏やかなさざ波といった景色を思わせる。まるでスウェーデンと庄内の風景が溶け合ったかのように。織りを通してその楽しさを伝えたい、暮らしを豊かにし、日々の暮らしの中で長く使ってもらえるものを作りたいと話す大滝さん。その思いと探究心が、愛されるモノを生み出していく。



購入はホームページ「itori」(itori-vav.com)のオンラインショップから。また3月17日(水)から23日(火)まで山形市の「エムアイプラザ三越山形店」1階エスカレーターサイドで開催する「MARUTA 期間限定ショップ」にも出品予定。午前10時～午後6時30分(最終日は～午後5時)。

☎090-1143-5991
✉info@itori.net

(取材・文 長谷川結)





杉勇蔵岡酒造場

庄内俳句紀行

寒造の酒蔵を訪ねる

ぼつかりと空が開き
その先に青空が顔をのぞかせる。
雲間から差し込むやわらかな光は
閉ざされた心にも晴れ間を運ぶ。
寒の入りの杉勇蔵岡酒造場へ向かった。

季語
寒造
(かんづくり)
寒の水を使って酒を醸造すること。またその酒。

集落に入ると、「杉勇」と書かれた煉瓦の煙突が目に入る。まだ分厚い冬空に、寒造りが行われていることを告げる蒸気が勢いよく立ちのぼる。

鳥海山の山麓にある上蔵岡地域には、「出羽國一の宮」である鳥海山大物忌神社蔵岡口の宮が鎮座する。杉勇蔵岡酒造場は、かつてその神社の近くで酒造りをしてきた酒蔵を源流に、大正12(1923)年、江戸時代からの「鳳正宗」を継承して創業、今の場所に設立されたという。

だけまるでスローモーションのように微細な菌が舞い降りる。寒の凜とした空気の中で職人の仕事ぶりに、思わず背筋が伸びる。

寒造はしめる水の生きて来し

―後藤比奈夫

杉勇蔵岡酒造場では、地下に流れる鳥海山の雪解け水を源とした伏流水を使い、「飲む人が長く付き合える酒」を目指し、昔ながらの手づくりで酒を醸している。仕込みの部屋に移ると蔵人が阿吽の呼吸でタンクの中の醪に権を入れていた。麹室ではまるでわが子を抱くように麹が温められている。酒造りは米と水に人が手を添えて複雑な発酵を促す。一つ一つ



製麹(せいぎく)

生き生きと膨らむ湯気や軒水柱

―水内慶太

蔵の中では甑から蒸気が上がっている。米が蒸し上がる時間が近づくと蔵人たちが慌ただしく動き、気迫が伝わってくる。高温で蒸した米を今度は放冷するが、杜氏はおもむろに蒸米をひとつかみ手に取り、「ひねり餅」を作って質感を確かめる。指先で蒸米をほぐして冷ましながら麹菌をふりかけた。ふわりふわりとその時間

の工程が子どもを育てるように大切に行われていた。

手に掬ふべきものあまに寒の水

―秋尾敏

米どころ庄内は冬になると田んぼが雪で覆われるため、その農閑期に農家の人が始めたのが酒造りだった。庄内には18の酒蔵があるが、それぞれ互いに切磋琢磨して成長してきたという。現在、酒蔵見学できる蔵元は限られているが、酒造りを知ることはその地域の歴史や文化を知ることにつながり、国酒である日本酒の奥深い魅力を再確認できる。

しろがねの地に置く樹影春隣

―あべ小秋

立春の前のよく晴れた日、鳥海山の勇姿を背景に白鳥が青空に羽ばたいていた。酒蔵の軒下からは雪解け水が滴り、上蔵岡を神社に向かって進むと、柿の木がその樹影をきらめく雪面に写していた。庄内平野の雪は少しずつ凍て解け、春はもう見えないところで始まっていた。



鳥海山



醪造り



蒸米

◆杉勇蔵岡酒造場 遊佐町上蔵岡字御備田47-1
写真・文||あべ小秋(月刊俳誌「月の匣」同人、俳人協会会員)